

世界の知見をつなぎ、革新を生む

自動車エンジニアでありテックビジョナリーの近藤康弘氏は、「共創」の促進をミッションに掲げ、自身のベンチャー企業 AZAPA を通じて、次世代技術を自動車分野への統合を牽引している。

社会がよりグリーンでスマートな未来へと移行する中で、従来の枠を超えたイノベーションが不可欠となっている。

この大きな変革の中心にあるのが「自動車」だ。電気自動車（EV）の普及や自動運転技術の進化により、自動車は今まさに進化の真っ只中にある。世界の自動車のおよそ 3 分の 1 を生産する日本の自動車メーカーが、車両技術イノベーションの最前線にいるのは当然と言える。

近藤康弘氏は、エンジン制御から量産システムまで車両設計のあらゆる領域に携わるソフトウェアエンジニアとしてキャリアをスタートした。2008 年には優秀なエンジニアたちを結集し、技術に特化したスタートアップ「AZAPA」を設立。その後、AZAPA は機能と性能のバランスを重視した自動車システム設計の分野で国内トップレベルの企業へと成長した。

日本の自動車産業の中心地である愛知県に拠点を構える AZAPA は、バーチャル環境での開発を可能にするモデルベース開発（MBD）の手法において高い評価を得ている。このアプローチにより、開発の迅速化とコスト削減を実現し、AZAPA は日本における MBD の成長を牽引する存在となっている。また、中国やアメリカといったテック拠点にも進出し、グローバルに事業を拡大している状況だ。

「私たちは、企業として成長を遂げつつも、常に“ベンチャー精神”を持ち、社会実装を俊敏に進めています」と近藤氏は語る。

AZAPA は自らを“Tier 0.5”企業と位置づけ、最先端技術を持つ開発者と従来型のサプライヤーの橋渡し役を担っている。高い技術力と豊かな発想を持つエンジニアたちが集まるこの企業で、近藤氏は自動車業界に新たな活力を注入しようとしている。

「私たちはシステムデザインの技術により、これまでのシステムの機能と機能のアーキテクチャーを分解し、AI や新たなイノベーションを融合し、再構築することで、エコシステム全体の最適化を目指しています」と近藤氏。AZAPA

の強みは先行開発段階の車両プロジェクトにあり、これはより効率的で、顧客中心的な価値の創造を実現するモビリティを設計する上で、極めて重要なステップである。

さらに近年では、エネルギーとモビリティのセクターカップリングへと結びつける取り組みも加速している。

AZAPA では、車両とバッテリーを独立したアセット（資産）として扱うことにより、自社開発のブロックチェーン技術を用いてエネルギーを地域間で安全に“取引”できる仕組みの構築を目指している状況だ。

さらに、スピノオフ事業である「HAKOBUNE」では、関連スタートアップへの投資を推進している。「これまでに蓄積してきた経験を活かし、より良いソリューションを生み出す必要があります」と近藤氏は述べている。

国内では、日本の大手電子機器メーカーと学術機関との連携も積極的に進めている。「共創」という言葉はしばしば流行語的に使われがちだが、AZAPA では実際に成果を出す共創プロジェクトが多数動いている。

「私たちは大学との共同開発にも取り組んでおり、新しいタイプの 3D プリンターなどを開発中だ。硬質・軟質素材を自由に組み合わせることで、人間工学に基づいたイスなど新しい製品を生み出せます」と近藤氏。

国際的にも AZAPA は拡大を続けており、海外の半固体電池メーカーと協業し、タイでの製造拠点の建設計画も進行中だ。

「こうした取り組みにより、グローバルな自動車産業全体のイノベーションを加速し、各市場のニーズに応える車づくりを生み出せるはずです」と近藤氏。

一方で、日本のエンジニアリング文化の強みに搖るぎない信念を持ち続けている。「どの国にも、それぞれの資源や歴史が育んできた独自の文化があります。日本では、一貫した品質へのこだわりこそが我々の強みだと信じています。そして、それ以上に日本が新たなグローバルにおける役割として、世界のイノベーションを融合し、世界の課題に取り組むパイオニアになると考えています。」と近藤氏は締めくくる。